

もう一つの

War Guilt Information Program

占領下、そして戦後に、
漢字をめぐる何が起こったか？

ずっと、漢字簡略化について漠然とした疑問を抱いていました。今回、時系列に漢字を取り巻く時代を調べていくと、意外な発見が多く、おかげで数々の疑問が解けて楽しかったです。

第一章 漢字簡略化への過程

今使っている漢字ですが、戦後に簡略化されたことは誰もが知っています。しかし、戦時中の昭和十七年(1942)に、その発端があったことは、あまり知られていません。

戦時体制下、様々な文物が工業製品を中心に標準化されていきます。近代戦には徹底的な効率化が求められ、その流れの中、漢字の書き方も標準化しようという事で生まれたのが「旧」標準漢字表なのです。

例えば「斉藤」の「さい」だけで、斎、齋、齊、齎など 20 種類以上あります。これら人名を除き、一般的な使用の際は「齊・斎」を標準漢字として使用するというのが、現在の JIS 規格のフォントに近い考え方として提示されたのです。特に画数が多い上、使用頻度の高い漢字は簡易字体が奨励されました。

老部	羽部	羊部	网部	缶部	糸部	米部
老考者	羽習翼	美群義	置	欠(缺)	箱箸節範築簡籍	米粉粗精糖
					系紀約紋納紙級素細終	
					組結絕給統糸(絲)絹經(經)	
					維綱綴綿線緣練縣縫縮	
					縱綵(總)績織繼(繼)績(統)	
					簿籠(篋)籤籬	粃粒粕粘粟粧粹糊糞糧
					糾紅紊紐純紗紘紛紡索	
					紫累紹紺絃絡紹綜綠綬	
					網綸緊緒締編緩緬緯縵	
					縛縞繁繕繡(繡)繩(繩)繪(繪)	
					繫繭繰纂織	
					罐(罐)	
					罪罴罰署罷罹羅	
					羊着	
					翁翌翰耀	
						綏

血部	行部	衣部	兩部	見部	角部	言部
血衆	行術衛	衣表袞袋被裁裏補製	西要	見規視親覺(覺)覽觀(觀)	角解	言計訓記訪設許詔評試
						詩話認誓語誠誤說課調
						談論諸講謝謹証(證)讖警
						議護譽(譽)讀(誦)變(變)
融螢(螢)蟬蟻蠅(蠅)	街衝衡	衷袂袖袴袷裂裔裕裝裳	覆霸	觸(觸)		訂訃訊討託訟訴診詐詞
		裸裾複褐褒襟襲				詠詢詣詭詮詰該詳誇誌
						誕誘誠誦誰誼請諒諫諫
						諭諸諺諾謀謁謂謄謙謠
						誥諧謨
						裡

簡易字体

一、左ノ簡易字体ハ一般ニ使用セラルベキモノデ、本表中括弧ノ上ニ掲ゲ
タモノ

並 乱 仮 両 実 属 糜 数 断 帰 残 浅 満 沢 濟 湾 独
 発 糸 経 総 繼 欠 台 旧 万 処 号 虫 蚕 証 変 豊 輕
 弁 辞 辺 錢 鉄 関 余 駅 体 塩 麦 点 齒 龜

(以上 常用漢字)

劑 囁 岳 徑 恋 扱 担 澆 炉 猷 窃 筭 繩 胆 莖 蠅 蝕
 訳 賤 踐 輻 通 遲 积 双 麴 麴 育 齋 齡

(以上 準常用漢字)

亂→乱 歸→帰 嶽→岳
 鹽→塩 灣→湾 發→発
 總→総 證→証 嶽→岳
 驛→駅 竊→窃 實→実

など

これらの漢字は戦後に簡略化されたと思っ
 ていましたが、右にあるように、標準
 化略字として、戦時中に使用が奨励され
 ていたのです。

しかし、64文字と戦後の簡略化に比べれ
 ば圧倒的に少なく、一般の手書略字を
 追隨した程度のものでした。

第二章 敗戦による急速な漢字改革へ

戦後、神道指令や武道の禁止等 GHQ は日本の伝統を破壊するために様々な仕事を矢継ぎ早に打ち出します。そして、その中で漢字も標的となります。

GHQ の占領政策となった国語国字改革のもと、簡素化と平明さを目指して、戦前の常用漢字(前章の標準漢字表)を基に当用(當用)漢字が策定され、文字数も**1850文字**に制限されます。

従前は、答申、すなわち単なる意見具申が内閣に提出されてから十分な期間、民間の討議に付されるのが一般的であったが、当用漢字については、**昭和 21 年(1946 年)11 月 5 日に(新)漢字表を公表後、わずか 11 日後の 16 日に内閣告示という極めて性急なものであった。** (ウィキペディアより抜粋)

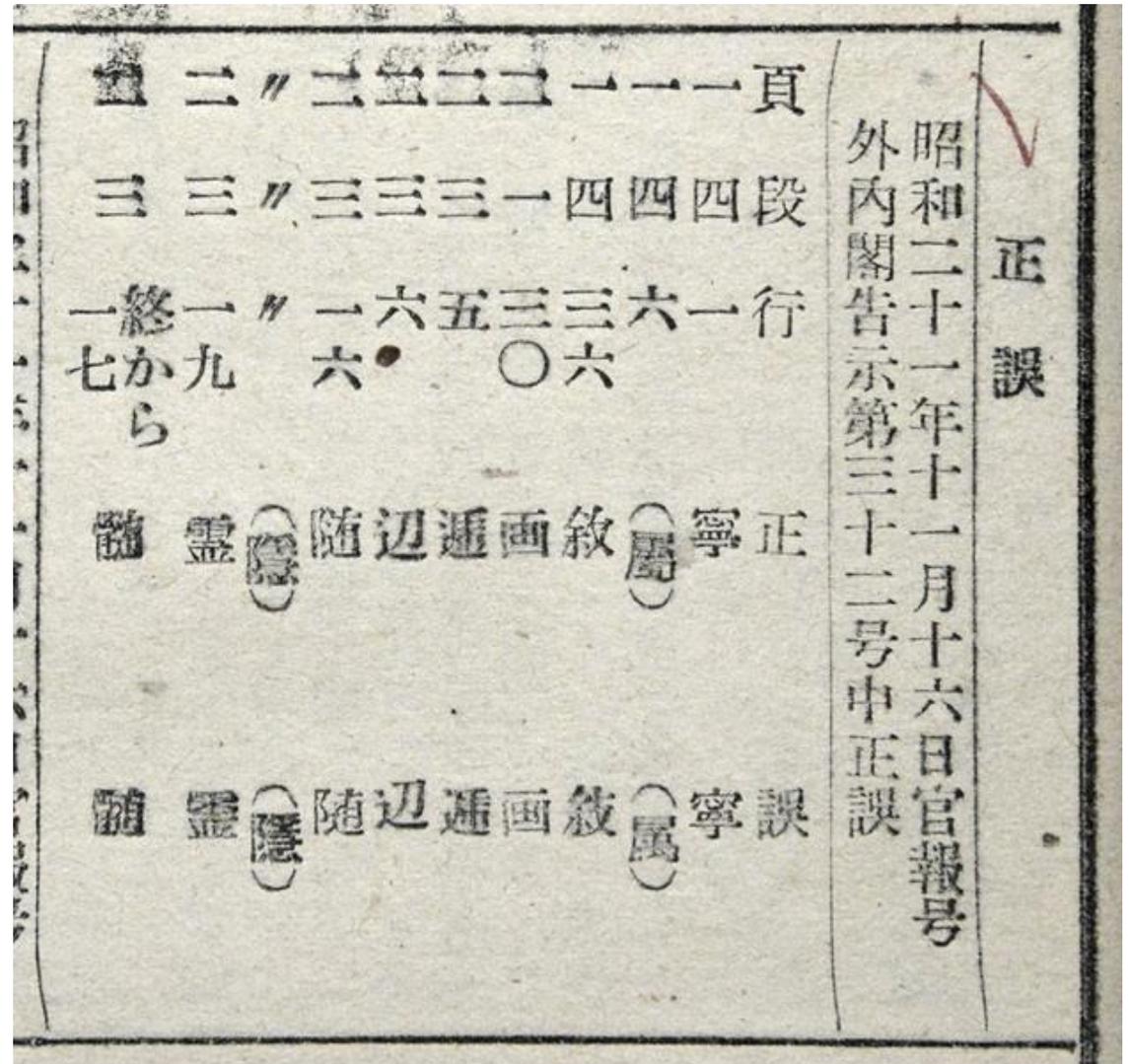
昭和21年11月～発布

敗戦直後で紙質が悪く判別しづらい漢字が数多く見受けられ大混乱した。

後に何度かこのような訂正がなされた。 →

そして混乱を收拾すべく昭和23年6月、更なる整理がなされ、当用漢字として一応の使用・指導指針が完成した。この時、多くの旧字体がなし崩しに消滅した。

新憲法制定と同時進行したので資料も極端に少ないです。



「正誤表」

①これら**当用(當用)漢字**は、1981年に**常用漢字**として整理と文字数追加されるまで、この時の変更が踏襲され、**1850文字**という文字数制限も続いた。

これは日本国憲法と同じく占領期の**わずか数カ月間**に数名の学者が独断で決めた簡略化と根拠のない文字数制限の指針である。

②当用(當用)とは「**さし当たって用いる**」という意味であり、ゆくゆくはローマ字ないし仮名文字化して廃止するという意図を含んでいる。この審議には戦前から漢字制限と仮名文字化やローマ字化を主張していた国語学者だけが集められ、廃止するものだからと杜撰な簡略化をしたと言われている。

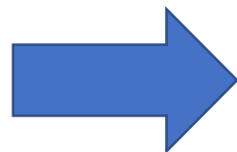
③当時識字率はほぼ100%であり、あれだけ難しい漢字を使った新聞雑誌を読みこなしていた。中国の様に漢字しかない国とは違い、簡略化しなくても漢字制限で済んだのである。よしんば、簡略化するならば、全国民の難漢字認識(読解度)を調査して、その統計に基づき対象の文字を絞るべきであった。

①戦後に作られた略字の紹介

『どう考えても適当にやったのではないか？』と感じる事例集

戦後の略字は、画数を減らすというよりも、関連性で憶えやすくするために、いじられました。本来の漢字を改竄した例を**抜粋**していきます。ここからは文字を絵画的に見ながら説明します。

様



様

本当によく使う漢字。私は
ここから疑問が膨らみます。

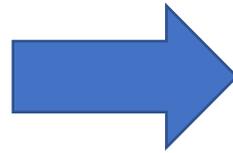
様

と突き抜けず覚えていました。
なぜ、こんな覚え方をしたのか？

氣 → 氦

これに限らず画数の多い所は(メ)にしてしまえ
という乱暴さは当用漢字の随所に見られます。

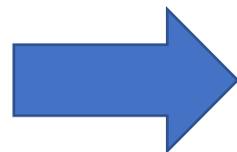
來



來

これは人が二人來ると教えればいいんです。画数も一画しか減っていないし、やる必要は無かったと思います。

亞

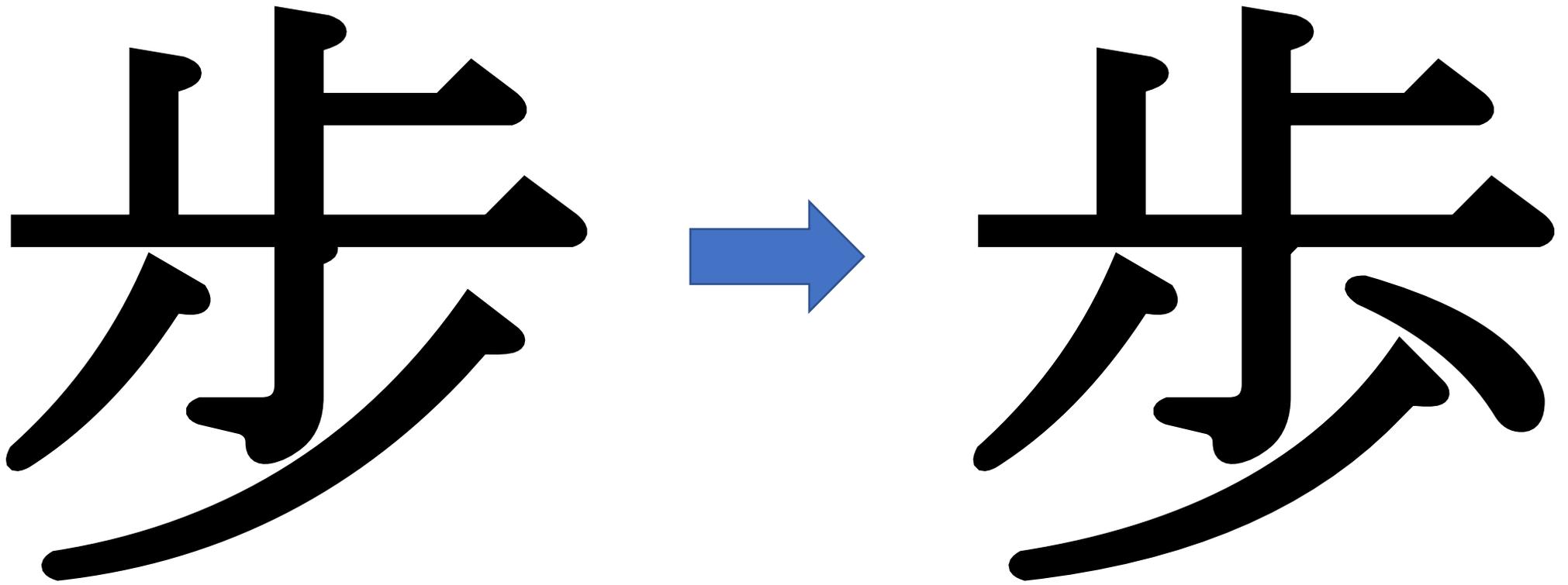


亜

亞も同じく、書き易さを優先したそうです。書道の世界にはあった書き方だそうですが、勝手に作った新漢字です。

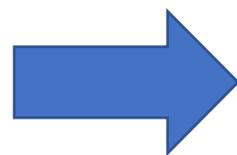
惡
鬼
滅
殺





なぜ画数を増やすのか？結局、先に小を教えて上に止まるを
乗っければ、教えやすいとの安易な発想です。整理統合の悪例

徳心



徳

これもやる必要があったのか？と強く感じる事例。『一』を抜いて、ひとつ徳を無くしたか？徳の無い人が増えるはずです。

実は犬だった漢字たち

突 → 突

この突という字は、穴から犬が突然飛び出してくる様を表現しているそうです。大にしたらまさに台無しですね。本来の語源を失っています。

他にもある犬だった字

器類涙臭

せいぜいこの程度の数なのですから、犬で良かったと思います。器類のテンは忘れそうですが。

膚犬 → 南犬

画数が多いので戦前からあった略字を採用。

皮肉にもこの文字だけ犬が残りました。

台灣にて



他にもあります。

塚拔殺寛逸

関連性から、犬と者のテンは残してもよかったかも

者煮著暑罽

壹(尙) 貳(弍)

參 → 参 肆_四 伍_五 ~

お札や契約書等で使用する難しい方の数字「大字」も簡略化されました。(尙)と(弍)は戦前にもあった略字です。

参加や惨劇などは使用頻度が高く、参も略字化したかったのでしょう、(尙)と(弍)の略字を採用する際に、ついでに簡略化されたのでしょうか？ (肆)以降は略されていませんし、これも理解に苦しむ略字化です。

專 → 專

傳 → 伝

轉 → 転

團 → 団

『專』という共通の構成部分を持っていたにも関わらずバラバラに簡略化された。これで「專」の部分が持っていた「まるい」「まるい運動」という共通義を失ってしまう。「專」の部分を共通の形に簡略化すべきだった。漢字文化の破壊例。

黄 → 𨿮 横 → 𨿮 廣 → 𨿮

鑛 → 鉞 擴 → 𨿮

これも中途半端に簡略化され、本来の共通部の『黄』との関連性を失った例。とりあえず『メ』や『ム』に略すいい加減さは解るが、これを略字ではなく新漢字として成立させた事に問題がある。個別の略字ならばこれでもいいのです。

國 (囯) → 国

國が本来の漢字ですが、三戸光圀の圀など様々な異字体(口囯など)が昔から存在しました。特にこの国という漢字は中華圏でも使われた正式な略字でしたが、口の中に王がいるのは封建時代の名残でダメだとの見解が中国(1936年中華民国)であり、「域」を表す古語の「国」の文字を見つけて採用します。その後、中共も同じ理由でこれを採用します。詳細は引用資料をご覧ください。

卩部

印危卵卷

厂部

厚原

厶部

去參

又部

及友反取受

口部

口古句召可史右各合吉

同名后向君吸告周味呼

命和品員唱商問啓善喜

單器

口部

四回因困固國(国)圍(围)園

圓(円)圖(図)囟(凶)團

土部

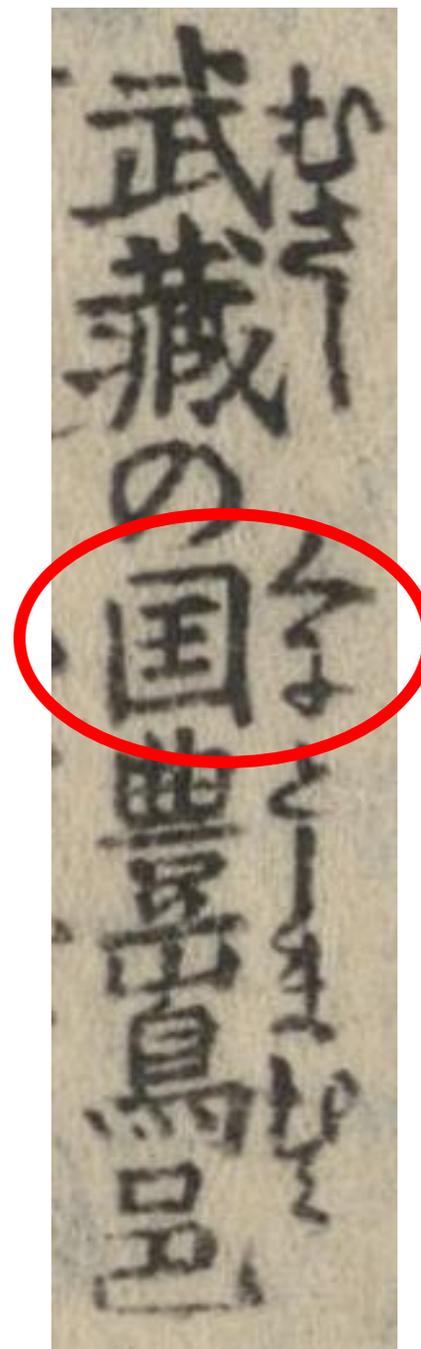
土在地坂埋城堂堅報場

人情本『比翼連理花廻志満台』

(国立国語研究所蔵) より

江戸時代の使用例

国



中國哲學書電子化計劃

国 國

U+56EF 異體字
同義字

台湾のサイトよりコピペ

日本には書体がありません

部首:	口+ 4 筆 = 共 7 筆.
字典出處:	康熙字典: 頁 217 第 19 辭海: 卷 3 頁 0250 第 2 漢語大字典: 卷 1 頁 0713 第 10
表面結構:	周圍: 口 , 中心: 王 。 Component of: 𠩺
國語發音:	guó ㄍㄨㄛˊ
康熙字典:	《康熙字典·口部·四》 国 :《正字通》俗國字。

【引用資料原本】百度バイドゥ百科 『国』の語源より

“国”的初文是“或”，也是“域”的古字。左图 A、右图 1-5 是周代中期金文，就是较早的“国”。字本义是“邦国”“封邑”。字的构形，有土地（“一”），有保卫城池土地的武力“戈”。右图 2 中，“口”的四方都有一横，这四横可能表示这重地是有人在四边把守着的。后来这四笔，简化成一笔；到了周代晚期的金文（左图 B；右图 5、8 亦有秦汉以后之说），“或”因借用为或然之“或”及疑惑之“或”，外面加了个“口(wéi)”，表示疆土地域的范围，读 guó。秦代的小篆（左图 C）继承了晚周金文的形体，后隶变为左图 D 和楷化为图 E。便把“国”变成定型的方块字了。

“国”的繁体字有十一画，书写速度慢，所以后汉便出现了左图 F 的简化“国”。这个“国”，“口”里从“王”，可能有“普天之下，莫非王土”之意，封建色彩很浓。以后，“太平天国”用的便是这个“国”字；魏晋六朝时代，在镜铭刻文里又出现了左图 G 的“口”里从“民”的“圉”字。可能有“国以民为本”之意。反映了春秋时代孟子的“民贵君轻”的思想，并且与“国”字形成强烈的对比。新中国成立后，于 1950 年代中期对汉字进行规范简化。据统计，“国”的异体有 40 多种，除上述形体外，还有“口”中加“氏”、加“戈”、加“方”、加“主”字等和三个秦（籀）代表“国”字等。在选择规范字时，起了争议。“国”历史悠久，容易书写，太平天国时期曾广泛使用，但是新中国人民当家作主，“国”并不符合时代潮流；“圉”符合当

时现状，也曾使用于民国时期，但因为过于生僻，没有广泛使用。“口”也曾被用来做“国”的简化字，但极易与“口”混淆，最终也没有被采用。时任汉字简化方案审定委员会副主任的郭沫若提议，“国”里面再加一个点，成为“国(左图 H)”，既便于书写，又有“祖国美好如玉”的意思，于是全体通过。有资料显示，在宋元时代的话本、唱词等民间文学作品里也出现了今天通用的简化“国”字。



A



B



C



D



Baidu
E



F



G



H

Google 翻訳に加筆

「國」の原文は「[或](#)」であり、これは「域」の古代の言葉でもあります。写真 A と右の B~D は、初期の「國」である周王朝中期の碑文です。本来の意味は「邦國」と「封邑」です。本来の「國」の形には、土地(“一”)と都市の土地を守る力“戈”が含まれます。図 2 では、「口」の 4 つの側面に直線があります。これらの 4 つの直線は、重い地面が四方の誰かによって守られていることを示している可能性があります。その後、これらの 4 つは 1 つに簡略化されました。周王朝後期 (B、は秦王朝と漢王朝の後にも言われています) では、「戈」と疑わしいとして借用されました。または、「口」を外側に追加して、領域の範囲を示します。读 guó を読んでください。秦王朝の小庄 (C) は周王朝後期の碑文の形を継承し、後に左が D、海華が E となりました。そのため、「國」は堅実な正方形の文字になりました。

「國」の伝統的な文字は便出现了左图 F 的简化“[国](#)”。, (口”に“王”がいる), その後、「[太平天](#)
[国](#)」は「“[民](#)”」という言葉を使用しました。魏、金、六王朝の時代には、左の写真の「口」
「民」の「口」が鏡の碑文に登場しました。「國は人に基づいている」という意味があるかも

しれません。春秋期の孟子的な「人は高貴で皇帝は軽い」という考えを反映しており、

「“国”」という言葉とは対照的です。筆者註『どうにかして王を貶めようとしている文章！』

なんともイデオロギー的解釈で中国共産党らしい表現です。

新中国(中華人民共和国)の設立後、1950年代半ばに中国語の文字が標準化および簡素化されました。統計によると、「國」には40以上の変種があり、上記の形に加えて、氏”、加“戈”、加“方”、加“主”「口」と秦(𠂔)は「國」などの略です。標準的な単語を選ぶときに論争がありました。「“国”」は歴史が長く、書きやすいです。太平天国時代にも広く使われていましたが、新中国で人民が国の支配者となる頃、「“国”」は時代の流れに合わず、「囯」は当時の状況に沿っているが、中華民国で使われていましたが、あまりにも珍しいものでした。、広く使用されていません。「口」は「國」の略語としても使われていましたが、「口」と混同されやすく、最終的には採用されませんでした。当時、中国文字簡素化計画検討委員会の副所長を務めていた郭沫若は、「“国”」にもう一点付け加えて、「祖国は翡翠のように美しい」という意味の「国(H)」にすることを提案した。データによると、今日一般的に使用されている簡略化された「国」文字は、宋王朝と元王朝の台本や聖歌などの民俗文学作品にも登場しました。

【参考資料】**国** 日本での不採用の経緯。 京都大学 安岡 孝一 教授の HP より抜粋

太平洋戦争中の昭和 17 年 6 月 17 日、国語審議会は文部大臣に標準漢字表を答申しました。標準漢字表には旧字の「國」が収録されていて、さらに、口の中に王を書く「国」がカッコ書きで添えられていました。つまり「國(国)」となっていたわけです。標準漢字表では、「国」はカッコ書きになっているものの、一般に使用して差し支えないということでした。そして、新字の「欧」(歐)が当用漢字になったように、「国」も同じく当用漢字になれるはずでした。しかし日本の敗戦によって、口の中に王を書く「国」という漢字は、数奇な運命を辿ることになります。

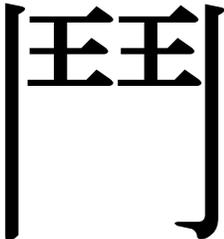
終戦後の国語審議会は、当用漢字表を作るにあたり、標準漢字表の略字は基本的に当用漢字表に採用する、という方針を打ち出しました。この方針にしたがえば、口の中に王を書く「国」は、そのまま当用漢字になるはずでした。ところが国語審議会は、この「国」という漢字には、いささか問題があると考えました。

「国」は、口の中に王がいる「くに」であり、戦前戦中の帝国主義を表現した漢字だということです。戦後の日本にそぐわない漢字だということです。この結果、昭和 21 年※11 月 16 日に内閣告示された当用漢字表では、旧字の「國」が収録されました。口の中に王を書く「国」は、当用漢字になれませんでした。

筆者註※昭和 23 年には今の「国」になるのですが、その間の議論が全く開示されていないようです。

②繁体字(台湾・香港)にも略字はある

鬪 鬪 → 鬪(日本)

これには  という略字が中国にあり、「牛土」と

か、台湾でも頻繁に使われています。絶対にこちらの方が簡単ですし、本来の漢字のニュアンスも残っています。結局「鬪」は新漢字なのです。正字の鬪を消すために新字を作ったのです。

③元が難し過ぎて致し方ないと思う略字

「獻」や「肅」「繩」など。難漢字。

龜 → 龜 繼 → 繼 竊 → 窃

屬 → 属 廳 → 厅 豐 → 豊

獵 → 狝 亂 → 乱 樓 → 楼

④略字としては有用だと思える漢字

多画数の文字から一部抜粋しているのので、元の漢字を想像できる。

壓 → 圧 圍 → 囲 醫 → 医

應 → 応 價 → 価 絲 → 糸

藝 → 芸 縣 → 県 蠶 → 蚕

蟲 → 虫 處 → 処 聲 → 声

雙 → 双 餘 → 余 與 → 与

點 → 点 罐 → 缶 號 → 号

豫 → 予 壘 → 累 疊 → 叠

日本の(新)漢字書体への最終批判

昭和 56 年（1981）当用漢字から常用漢字へと名称変更され、新たに 96 文字が追加されます。（現在：2010 年改訂 2136 字／4388 音訓）

この経緯は日本語ワープロの出現により、アルファベットに負けない速度で文章が書ける様になった事が大きな要因となっています。技術の進歩は「当用」を主張していた、国語左派(ローマ字・カナ文字論者)の論拠を奪いました。結果、「当用」ではなく「常用」として漢字を使い続ける事が表明されたのです。

そうなってくると、今までやって来た漢字変革の意味も薄れてき

ます。辞書も引かず、いくらでも変換候補が出てくる機械の出現を
いったい誰が昭和 21 年当時に想像したのでしょうか？ ※

結局、戦後、先走って、日本人が勝手に新漢字を創出した事がい
けなかったのであり、多画数の漢字を教えるのは後回しにして略字
として使う事にすれば、このような文化破壊は無かったはずで
す。新聞雑誌など簡易的な文章は新略字を使い、学術書などは本来の書
体を使えばよかったです。昭和 17 年の時点ではこのような発想
であり、簡易化による速読化は社会的な効率化として求められたが、
学術的・文学的・芸術的な要素には踏み込んでいなかったのです。

※当時はカタカナタイプライターしかありませんでした。

第三章 置き換えで漢字本来の意味を失う

当用漢字表の告示(昭和21年)により、当用漢字表 **1850 文字**の中
ない漢字を含む熟語は、別の言葉に言い換えるか、仮名書きすることと
された。(要は 1850 の漢字だけにして、他は使うな！という事)

しかし、別の言葉を使うと意味合いが異なる場合があり、また、面倒で
あることからあまり行われなかった。

仮名との交ぜ書きも行われていたが、意味が取りにくく、不自然な感じ
が伴った。

例えば 障碍者。碍は当用漢字表にないので「障がい者」となる

こう書くと、漢字を知らないのか？と思われてしまいそうで、書き手は
品下がると感じてしまいます。

運動会の「障碍物競走」も「障ガイ物競走」と書かざるをえません。

そこで、いつその事と、「しょうがい者」と書く者も出てくるし、指示通り「障がい者」と書く者もいる。

この様に表記上の不統一で、非常に読みにくい文章が氾濫しました。

そのため、**当用漢字表にはない漢字を同音の当用漢字で書き換える**ということが行われるようになりました。

「障碍者」は、害、外、などに置き換えて「障害者」「障外者」などと書くという事です。

しかし、当初は出版・新聞各社が独自に書き換え方を定めていたので、書き換え方がまちまちとなり、さらなる混乱が生じていました。

そこで、国語審議会で書き換えの指針を示すことになり、**昭和 31 年 (1956)**に「同音の漢字による書きかえ」として報告されました。

あ

1850 文字の罨

愛慾^{*}→愛欲 闇^{*}→暗 安佚^{*}→安逸

暗翳^{*}→暗影 暗誦^{*}→暗唱 按^{*}分→案分

闇^{*}夜→暗夜

い

意嚮^{*}→意向 慰藉^{*}料→慰謝料（法）……

あ～以降 詳しくは最後の参考資料をご覧ください。

今に至る、漢字熟語批評①

『元は別だった漢字たち』事例集

乱暴にも、元は違う複数の漢字に、音が同じである一つの漢字を当てた最悪の二事例。

よって、本来の意味を失っただけではなく、消えた文字による概念化能力も失った。

辯 判 辨 狛 → 弁

これら意味の違う文字を乱暴にも全て**弁**にしてしまった。辨髪の**辨**も含めれば**弁**だけで四つの概念を含んでしまう。

辯

①言葉を述べる能力

(例) 弁の立つ人ですね。

②述べる、主張する。

(例) 弁護士 弁論

依って、**辯**の立つ人・**辯護士**が正しい。

六月廿九日

登言

暑中休業せず法律事務に従事す
も心切丁寧に取り扱ふ更に紹介を

辯護士

從四位
勳四等

鳥

事務所

京橋區新橋日吉
電話 (八

辯護士

野

出張員

辯護士

朝鮮語
通譯

大

生饑都合により齒科醫會組織委
名を詳す

戦前の新聞

辨

①わきまえる。正しいか判断する。

(例) 弁証する (弁明、勘弁など)

②けじめをつけ処理する。仕分ける。

(例) 弁理士 弁償 (弁済、弁当など)



辨理士バッチは今も辨です。(弁当は便當とも書きます)

依って、辨證する・辨理士・辨償が正しい。

戦前の書物

マルクスの

唯物弁証法

證→証という略字

も学術書には使わ

れていませんね。



瓣

①花びら。

(例) 花卉。

②花びらから転じバルブの訳語

(例) 心臓弁膜症 安全弁

依って、**花瓣・瓣膜症・安全瓣**が正しい。

昭和 34 年作

戦後でも
弁ではない
ですね。
さすがに
大作家です。



訣別 → 決別

蹶起 → 決起

これも適当に「決」に決めたのでしょう。ともに、何かを決めるような意味は全くありません。『訣』には、人と別れるという意味があり、同じような意味の「別」を重ねた、「わかれ」を表す熟語です。

そして、「蹶」は①つまづく②倒す、くつがえす③はね起きる、などの意味があります。そして蹶には「𨔵」という略字があったのに、画数が多いとかではなく、当用漢字の漢字制限を優先し、置き換え語にしたのです。今の辞書には「決意して立ち上がり行動を起こす事」とあります。

今に至る、漢字熟語批評②

『音が同じだとの理由で、似たような漢字に置き換えた結果、意味が通らなくなった』事例集

当用漢字表にある漢字に置き換える際、いい加減なことをして本来の意味を失った酷い事例。

障碍者 → 障害者

碍(礙の俗字) ①妨げる ②本来はしょうげ障礙という佛教用語で

悟りの妨げになるものを指す。融通無碍や日本碍子(企業)など普通に残っている漢字。『害』では全く意味が違う。単に普通の事が出来ないとの表現が、悪い事のように表現されている。これに関しては障碍者団体が怒るのも当然です。阻碍→阻害。妨碍→妨害 も。

疏通 → 疎通

疏：塞がった物を切り開いて通す。箇条書き。

疎：あらい。まばら。親しくない。うとい。

これは、正反対の意味の漢字を当てた最悪の例。

『疎』は過疎の様にまばらで、疎遠は隔たった状況を言う。『疏通・疏水』の様に隔たり無く通ずる状態の反対語である。疏通は変換さえ不能！

拔萃 → 拔粹

これも酷い例。『拔』なんて変な新漢字になった上、次はコレ！

萃：集まる・集める・やつれる・草むら

粹：純粹な事・優れている物・いきなこと

『萃』でなければ、抜き取って集めるという意味にならない、『粹』では抜きんでて優れているという意味になってしまう。

これも、もう取り返しがつかないという事例です。

格闘 → 格闘

格：打つ・殴る・ぶち当たる

格：地位身分・物事の仕方、流儀・決まり、法則

これも『格』では意味をなしません。だいたい、
てへんの漢字がきへんになった時点でおかしい。
意味が違うに決まっています。

熔接 → 溶接

熔：鉱物が熱せられて一つに溶けあう。溶かす。

溶：固形物が液体化する事。溶ける。

これも、変換したら「溶接」が常用となり、「熔接」が常用外となっていました。金属を溶かすのにさんずいなんて有り得ないですね。

「熔接」「熔岩」「熔鉱炉」などこちらが正解。

義捐 → 義援

「捐」には、すてる・捨て去るという意味があり。本来、義侠心から喜んでお金を捨てるという意味。佛教用語の「喜捨」にも通ずる。

「援」では援助する事となり、助けてやっているというニュアンスになる。最近、募金の際、本来の「義捐金」に戻そうという動きも見られます。

雇傭 → 雇用

「雇」には一か所に留め置くという意味がある。
そして「傭」には「傭兵」の様に賃金を払い養う
という意味がある。

「用」では、給料を支払っているのとの意味が消
え、単に一か所にとどめ用いているので、奴隷労
働か何かのような意味合いになってしまう。

侵掠 → 侵略

掠奪の様に掠には「掠め取る」という意味があり、

略には、「省く」「はかりごと(計略)」の意味しかない。侵略では、意味が通らない。無理やり侵入して謀略行為をする？

だいたい掠奪≒侵掠と関連性で漢字の意味を覚えていくのに、これでは思考が深まらず、漢字理解も進まない。

智慧 → 知恵

智(賢い)慧(物事を見抜く力)というよく似た意味の言葉の複合化であり、知(知る)恵(恵む施す)では意味が通らない。智が知になるのは許せるが、恵なんて全く関連性のない漢字です。慧が難しいのでこうしたのでしょう。智恵という中途半端な表記もあります。この「知恵」、戦前ならば、女の子の名前と認識されたでしょう。「知恵ちゃん」「智恵ちゃん」ですね。

尖端 → 先端

尖閣諸島の尖。これも当時は当用漢字外だったようで、昭和31年にはこのような指導があり今に至っています。

尖った端と単なる端っこ、意味は全く違います。しかし、パソコン変換では「時代の尖端」「マストの先端」なんて例文まで出てきて、混同が避けられるようになってきています。良いことです。

使い分けましょう。

交叉 → 交差

叉は「音叉」の様に二股になった状態を表す。

二手に分かれていた道が交わるから「交叉点」であり、「差」では意味が通らない。

音叉

二股になってますね

昔の聴力検査はこれでした

ギターのチューニングもこれでした



伶俐 → 利口

俐：賢い、知恵が回る。『伶俐』の俐

巧：上手である、巧みなこと。『巧者』の巧

この「口」っていう字、どういう関連で出て来たんでしょうか？

利口な子は口が達者だから「口」なんんでしょうか？

これも最悪の部類に入る置き換えです。

戦歿 → 戦没

調べていて、一番勉強になった漢字『歿』。この漢字自体が死ぬという意味であり、「病歿」ならば病で死ぬという意味。『没』には沈むとの意味はあるが、死ぬという意味は本来ない。病没では、病に沈んでるとなり、死んだ事にはならない。

焦躁 → 焦燥

躁：せかせかとあわただしい。さわぐ。躁鬱病

燥：乾く(乾燥)。かわかす。水分がなくなる様。

焦は①焦げる(焦土)②転じて、思い煩う(焦心)

乾燥の燥には、心情を表す意味は無い。これでは

焦げて乾いていくという意味にしかならない。

媾和 → 講和

媾：①(男女が)交わる ②よしみ。仲直りする。

講：①説き明かす(講義) ②ならう(講習)

講和会議などと書くが、本来「媾話会議」でした。

「媾」一文字に仲直りの意味があり、講では和する事を講ずるとなり、意味不明な表現となっています。

掩護 → 援護

掩：①覆い隠す②かばう、かくまう③急襲する。

援：①手を差し伸べる、救う（援助）②引き上げる

応援・援軍ならばまだ意味が近いが、援護射撃で

はニュアンスが異なってくる。微妙な書き換え

ではあるが、「掩護射撃」でなければ、かくまい

ながら、味方を助けるとはならない。

銓衡 → 選考

銓：①はかり、量る②人物や才能を量って選ぶ

衡：①天秤量りの竿②はかる、適否を判定する。

本来、成績を点数として「はかる」という意味しかない。選んだり、考えたりする事は臆履して選ぶことではないのか？以下、辨理士のHPより。

例「令和2年度弁理士銓衡試問について～」

肝銘 → 感銘

肝：①きも②胆力、精神力③心、真心④要点

銘：①金属看板(銘板)②心に刻む(座右の銘)

本来「肝(心)」に「銘(刻む)」ずるという熟語。

感ではこの「文字を刻む(銘)」という文字とつな

がらない。感鳴とでもした方がまだ熟語となっ

たかしれません。意味をなさない熟語の一例。

香奠 → 香典

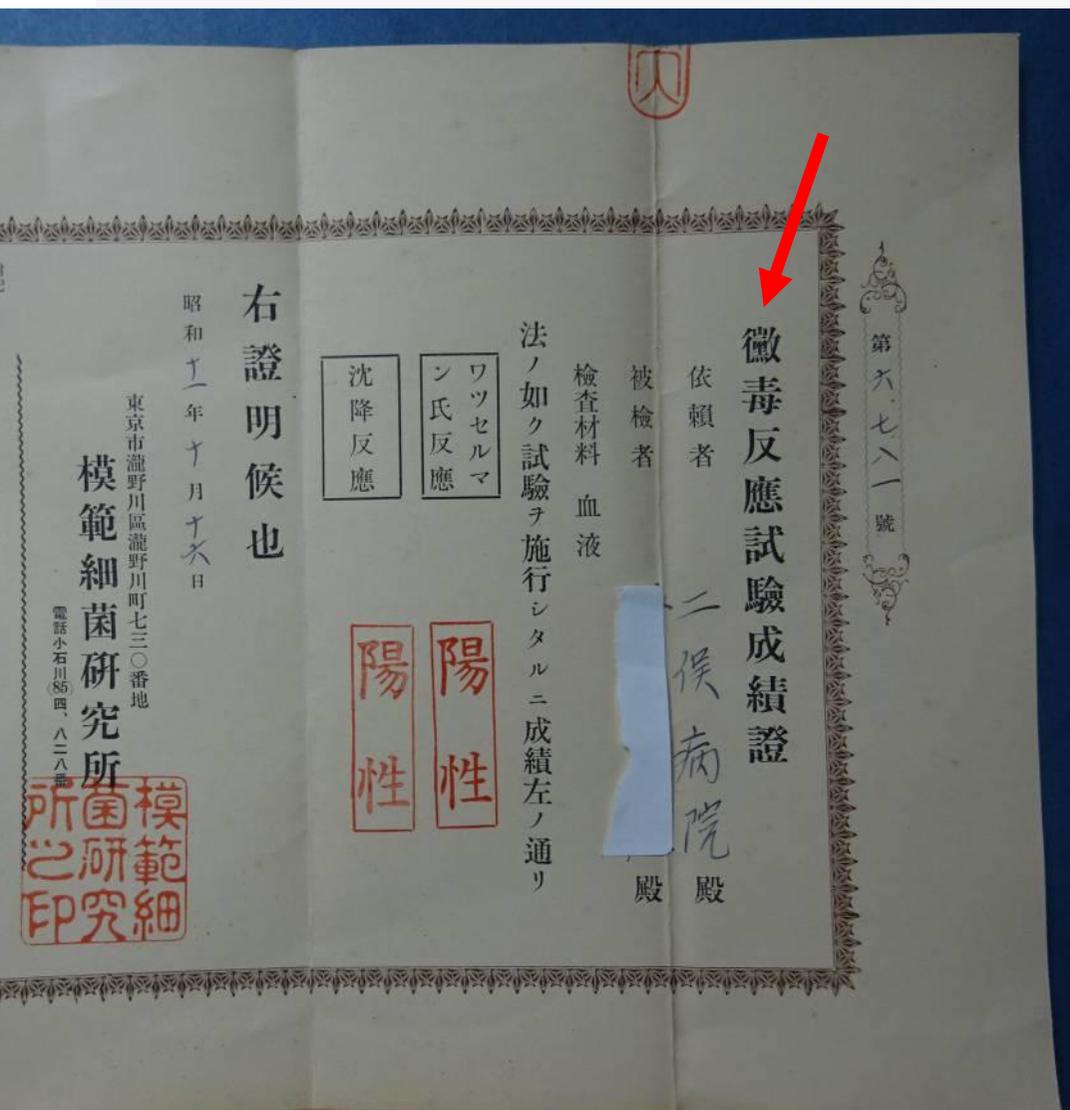
奠：①神佛に供え奉る(奠茶)②供え物(奉奠)

典：①大切な書物(経典)②抛り所がある(典抛)

これは「奠」の文字こそが重要で、ズバリ供えるという意味。辞典の「典」では香る書物という意味になってしまい、弔いにもなりません。南無阿弥陀仏とか、佛事の漢字も相当略字に置き換えられました。

黴毒 → 梅毒

黴菌の「黴」が「梅」に中国由来の俗称が、正式な医学用語に置き換わった例。前出の弁膜症の様に医学用も相当新語(俗語)に置き換えられててています。



慰藉料 → 慰謝料

藉：①いたわる(慰藉)②かこつける(藉口)③敷く

謝：①お礼(謝礼)②わびる(謝罪)③ことわる(謝絶)

法律用語も相当置き換えられ、本来の意味からずれていったものが多数あります。これも本来「謝る」という意味は無く、法で捌ききれない事に対し「いたわり」のお金を出す、という意味でした。

第四章 造語能力低下の要因

これら、常用漢字制定と漢字制限の欺瞞と共に、様々な漢字をめぐる表記法の変化が戦後進んでいきます。代用漢字を許してきた背景には、同時進行で、一文字、一文字の漢字の意味を知る機会が減っていった事も大きな要因です。(能力低下は国民がバカになったわけっではなく、学者や作家の責任も重いという事です)

まとめとして、複数の研究者の学術論文から、ここに至った経緯を紹介すると共に、造語能力の低下は仕組まれたものであるという考察を更に進めていきます。

然らば、何故、この様な、国語改革が進んでいったのか？
(私見ですが)結論を先に述べます。

『フランス語の様に、正書法が確立していない事へのコンプレックス』

漢籍に明るく成れば成るほど、漢字を憎悪していく事に成るという逆説の根本はこれです。各々が好き勝手に書ける漢字語、特に訓読が有る限り『正書法』は確立しません。

現在でも、日本語は、正書法が確立していない言語なのです。

例えば、『有る』と書いていいし『ある』と書いてもいい、これでは、正しい書き方はどちらなのか？日本語を習う外国人に説明がつきますか？

言語・文章を生業(なりわい)とする、学者や作家たちは、この問題で悩み続けていきます。

生業(sei-gyou)と漢語で書いて、(なりわい)と読む。これは言語とは言えず、脳内自動翻訳なのです。この様な言語は世界に存在しません。

㊤戦前からあった振り仮名(ルビ)廃止論。

山本有三「戦争と二人の婦人」1939年巻末文より

私は思ひます。文明國である以上は、その國の國語をもつて書かれた文章は、それがそのまゝ、誰にでも讀めるものでなくってはいけないと思ひます。これは極めて當りまへのことであると同時に、わが國においても、決して出來ない相談ではないのです。めいめいがその氣になれさへすれば、わけなく行はれる事なのです。

戦後、国語改革の中で、この山本ら、振り仮名廃止論者が大きな勢力となります。当然、影響を受けた多くの出版社が面倒な振り仮名をやめていきます。そして、この傾向は年々増していき、徐々に、書物から振り仮名は、駆逐された上、**難しく読みにくい訓読はひらがな書きとなっていきました。**

戦前 この様な広告には振り仮名(ルビ)を振ってある事が多かった。当然、漢字に弱い消費者にも購入してもらいたいのだから、読めない状態では広告として意味がない。

【振り仮名の効用】

- ①平仮名カタ仮名が読めれば漢字を覚えていく事が自然にできた。(広告を見るだけで高等教育に近づける事、その価値は大きい)
- ②書き手は相手の言語習熟度を顧慮せずとも、文章を書くことができた。(文章レベルの低下防止)





悲壯なる外交戦と國民不滿の爆發

媾和談判と帝都焼打

加藤 武雄

日露戦の和議開始まで

黒木爲楨を司令官とする第一軍は鴨綠江より進み、九連城、鳳凰城を打破つて迪巖に達し、奥保章を司令官とする第二軍は南山から北上して熊岳城、分水嶺と陥れ、野津道貫を司令官とする第四軍は板木城を抜き、やがて、第一、第二、第四の三軍は並び進んで遼陽へと向つた。遼陽を占領したのは九月三日、つゞいて沙河を占領したのは十月十

五日。あくる三十八年一月二日、乃木希典の率ゐる第三軍は、悪戦半歳の後旅順口を陥るゝや、長驅して來り合し、三月十日、大風黄塵を捲くの日、奉天城の總攻撃に空前の大捷を博した。
(三月十日、此日、奉天城を占領せり)
總司令官大山巖の陣中日記には、たゞこれだけの文句が無造作に記されてゐたさうである。いかにも大山巖らしい書き方だ。そして、その日記のしまひの方には、

(一將功成萬骨枯)

といふあの有名な詩の文句が、ぼつりと一句書きつけられてあつたといふ。流石に名將の、心の深さが想はれるではないか？

奉天の大激戦中のある朝、一人の參謀が戦況を報告にやつて來た。死活の一戦を前にして、參謀の面上には著るしい焦躁の色があつた。その時、大山は、

「はあ。今日も戦がごはすか？」

と、例のぼやけた顔、ぼやけた調子で云つたので、若い參謀はその賜氣さにあきれながらも、あたまの血が一ぺんにさがつて自分の鼻鬚がはづかしくなつた。——これは何人でも知つてる話だが、このヌーボー元帥の胸中に、いかに慎密な考慮がめぐらされてゐたかを知るものは無い。元帥が、總司令官の大命を拜した時だつた。彼は、海軍大臣山本權兵衛を訪りて、かういつた。

「戦は勝ちます、が、引上げ時が肝腎でござす。こんな時

愼吾とんでももて呉れたらと思ふのだが——。いくらか餘裕のあるところで鞘を収める。その大切なることを、あなたにお願ひします。恐らく、非難攻撃の的となるだらうが、それがお國の爲でござす。」

(愼吾とん)といふのは西郷從道のことだ。大西郷の弟だけに、よく大局を見通しうる達識の人。大山は、この時、はしなくも、その從道の大眼玉を憶ひ出したわけだつた。

旅順は陥れた。奉天は占領した。連戦連勝に國民の意氣はあがつた。ハルビンへ、シベリアへ！ バイカル以東をとつてしまへ！ と叫ぶものがあつた。

その頃——三月下旬の事だつたが、滿洲軍總參謀長兒玉源次郎は、奉天大戦の始末を奏上するため、勅命によつて戦地から歸つて來た。動かざること山のごとき大山總司令官に、この上もなき好きパツテリイとして配された智謀横の兒玉總參謀長！ 兒玉は赫々たる武勳を帯び、滿洲の歡呼に迎へられて入京した。だが、戦陣の勞苦にやつれた

㊤漢文訓読文の減少による「一字漢語」習得機会の減少

教育勅語 の中から一字漢語の訓読を抜粋(赤い字)

ちんおも わ こうそこうそう くに はじ こうえん とく た しんこう
朕惟うに、我が皇祖皇宗、国を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり。

わ しんみん よ ちゆう よ こう おくちようこころ 一つ よよそ び な
我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にして、世世厥の美を濟せる

こ わ こくたい せいか きよういく えんげん またじつ ここ そん なんじ
は、此れ我が国体の精華にして、教育の淵源、亦実に此に存す。爾

しんみん ふ ぼ こう けいてい ゆう ふうふあいわ ほうゆうあいしん きようけんおのれ じ
臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持

はくあいしゆう およ がく おさ ぎよう なら もつ ちのう けいはつ とつき じようじゆ
し、博愛衆に及ぼし、学を修め業を習い、以て智能を啓発し、徳器を成就

すすん こうえき ひろめ せいむ ひら つね こつけん おもん こくほう したが いたん
し、進で公益を広め、世務を開き、常に国憲を重じ、国法に遵い、一旦

かんきゆう ぎゆうこう ほう もつ てんじようむきゆう こううん ふよく かく ごと
緩急あれば、義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。是の如

きは、^{ひと}独^{ちん}り朕^{ちゆうりよう}が忠^{しんみん}良の臣民たるのみならず、^{またもつ}又^{なんじそせん}以て爾^{いふう}祖先の遺風を

^{けんしよう}顕彰するに^た足らん。

^こ斯^{みち}の道は、^{じつ}実^わに我^{こうそこうそう}が皇祖皇宗の遺訓^{いくん}にして、^{しそんしんみん}子孫臣民の^{とも}俱^{じゆんしゆ}に遵守すべき

^{ところ}所。^{これ}之^{ここん}を古今に通^{つう}じて^{あやま}謬^{これ}らず、^{ちゆうがい}之^{ほどこ}を中外に施^{もと}して悖^{ちんなんじしんみん}らず。朕爾臣民と

^{とも}俱^{けんけんふくよう}に拳拳服膺して、^{みなそのとく}咸其徳を^{いつ}一にせんことを^{こいねご}庶幾う。

勅語の冒頭「朕^{ちんおも}惟^うに」の「惟う」を覚えていれば、例えば「思惟(しい・しゆい)」という単語が出てくれば、「惟」は惟う(おもう)だから、「思」と「惟」が重なって強調されて、深く考える事かな？と自然に理解できます。これが「惟」という一字漢語を理解しているという事。

本当は、この様に、訓読があったからこそ漢字理解が進んだ訳です。

HP でみつけた一橋大学 本田由美子氏の研究論文より

50 年前の本(雑誌 90 種)と最近の(知恵袋)の語彙比較の結果、平仮名や他の漢字に置き換えられた漢字。一部抜粋。

①容れる(いれる) ②件(くだん) ③対う(むかう) ④能い(よい) ⑤購う(あがなう) ⑥了える(おえる) ⑦検べる(しらべる) ⑧勿れ(なかれ) など

この様に消えていきつつある訓読が多い事を確かに感じていますが、もし戦前の頃の様に全てに振り仮名が振ってあればどうでしょうか？

⑧まで全く問題なく、訓読として本来の漢字の語義に近づけたはずです。

前出の広告の中で「^{かがや}輝く」とありましたが、概念として、輝=かがやきとして覚えていれば、今度「輝度」という漢字語が出てくれば、「かがやく、度合い」と理解できます。日本の高等教育が急速に進んだ背景には、高度な二字漢字熟語を瞬時に理解できる、文化的背景があったのです。

㉔ 今も影響力を持つ訓読廃止論

戦後日本の代表的知識人、梅棹忠夫うめさおらが社会に与えた影響。

漢字廃止や日本語のローマ字化など様々な提言をしてきた梅棹氏が最終的に、すぐにでもできる事として奨励した「訓読廃止論」とは？

「こんな理屈です」

① 訓読は、中国語の翻訳である。

例えば「来る」と書いて「くる」と読むことは、「來(Lai)」という中国語を頭の中で「くる」という日本語に翻訳しているのであり、「來(Lai)」は「來訪」のように漢語として使い、「来る」という表記は固有の日本語として「くる」とカナ書きにすればよい。全て(すべて)行く(いく)美しい(うつくしい)、などは全て止めてカナ書きにする。止めても(やめて)(とめて)? どちら?

② 当然、こうなれば、平仮名が多くなり読みにくい文章になるが、分かち書き(文字間を空ける)を多用すれば問題なく読みこなせる。

【原文】 ネットで拾った文章

有名なのは、明治期の「郵便制度の父」前島密である。前島は、江戸幕府最後の将軍、徳川慶喜に仮名文字での教育の普及を建白した。明治初期には、初代の文部大臣を務めた森有礼が英語を公用語とするよう提唱、終戦直後には作家の志賀直哉がフランス語を公用語にせよと主張した。

【訓読廃止】 梅棹理論で書き変えてみました

有名なのは、明治期の「郵便制度のちち」まえじま ひそか である。まえじまは、江戸幕府最後の将軍、とくがわ よしのぶ に カナ文字での教育の普及を建白した。明治初期には、初代の文部大臣を つとめた もり ありのり が英語を公用語とするよう提唱、終戦直後には作家の しが なおや がフランス語を公用語にせよと主張した。

【カナ文字化】 完全言文一致体(名前のみカタカナにしました)

ゆうめい なのわ めいじきの「ゆうびんせいどの ちち」マエジマ ヒソカ である。マエジマわ、えどばくふ さいごの しょうぐん、トクガワ ヨシノブに かなもじでの きょういく を けんぱく〜
(漢字を廃止して全てハングル化 した韓国朝鮮語はこのような書き方です)

日本の漢字文化への最終批判

上記の様に、①ルビ廃止 ②漢文訓読機会の減少、③訓読廃止論、これら三点と第三章の置き換え漢字問題が、絡まった結果で、現在の漢字を取り巻く状況が作られています。

ここまで説明して、最初にやった漢字の簡略化は、それほど重要な要素ではなく、問題は戦後教育やマスコミ文化の中に漢字と日本語を体系的に考える知性が存在しなかったことが問題であったと感じました。

結果、個々人ができる事を考えてみました。

- ①常用漢字の枠を捨て、置き換え漢字の用語を元に戻す事
- ②ルビを打った上で、難漢字の訓読を積極的に使っていく事
- ③教育勅語のような漢文読み下し文を積極的に使っていく事
(しかし、これに関しては学校で習っていないので難しいと思います。)

最終章 カタカナ語の氾濫と漢字の未来

江戸末期～明治初期の旧士族階級は信じられないようなスピードで、西洋言語の概念語を漢字熟語に翻訳していきました。

例えば、高度な哲学用語で、

metaphysical(メタフィジカル)＝形而上的 physical(フィジカル)＝形而下的

このような翻訳語があります。形而上は抽象的理想的で形を持たない概念、形而下は感性で知りうる形をもって現れるもの。です。

これを翻訳した井上哲次郎※は、まず元のラテン語の哲学の用語の意味を原文で理解し、その後、よく似た概念語を中国古典から探します。

結果、「易経」繁辞上傳の中から、

『形而上者謂之道、形而下者謂之器』訓読→「形よりして上なる者、之を道と謂い、形よりして下なる者、之を器と謂う」という一文を見つけます。

この「道＝抽象的概念」「器＝具象的概念」という漢字語の二分律に、新たにラテン語の二分律の概念を重ね合わせ、新概念としたのです。

この様な高度な翻訳語を作るには、ラテン語・ギリシャ語の西洋古典・中国古典の全て、そして日本の古典、これらに精通していなければできない神業だとも言えます。

現に、当時の中国人はうまく翻訳できず、今でも日本人が漢字に翻訳した西洋の概念語を使って哲学的な思考をしています。

※井上 哲次郎(いのうえ てつじろう、[1856年2月1日](#)([安政2年12月25日](#)) - [1944年](#)([昭和19年](#))[12月7日](#))は、[明治時代](#)の[日本の哲学者](#)。号は異軒。通称「井の哲(イノテツ)」。[筑前国](#)生まれ。欧米哲学を多く日本に紹介し、帝国大学で日本人初の哲学の教授となった。また、[新体詩](#)運動の先駆者でもある。[大東文化学院総長](#)(第2代)などを歴任した。

結論から言うと、戦後ではなく、中国古典を学ばなくなった明治期から、漢字での造語能力は徐々に衰退していったのであり、前出のような高度な翻訳語は減っていき、原文のカタカナ表記となっていきます。

よくカタカナ語の氾濫を嘆く御仁がおられますが、では、誰が翻訳できるのでしょうか？単に漢字を繋ぎ合わせただけでは深い意味にはなりません。

結局、誰にもできないから、外国語(特に英語)をそのままをカタカナにしているのです。

漢字をやめた韓国でも、その点は顕著で、外来語だらけになっています。エアコン・テーブル・コンピュータ・スポーツセンターなど、ちょっと発音は違いますが、全く日本と同じです。

最後に、漢字を捨てきらず、日本人がギリギリ漢字圏の中に留まったことでの漢字の可能性を紹介して終わります。

①流行語の輸出

近年のアニメやサブカルチャーから中華圏で受け入れられた表現。激安など(激～) 爆買など(爆～) 爆紅(大ブレイク)の様に台湾発で完全に中華圏に定着した新語もあります。巨乳(巨～) など多数あり。鬼滅の刃も、鬼滅之刃と表記されていますが、文法的には滅鬼之刃でないと中国語としてはおかしいのです。でも、鬼を滅ぼすという日本語の語順が面白いからそのまま受け入れている訳です。

②漢字語での共通知

なんだかんだと言っ、中国人が日本に居つくのは、街中に漢字が溢れているからに他なりません、ニュアンスは違っても、漢字がある事で日常生活が楽だから日本を気に入っているのです。

また、漢字を捨てなかった事で、少し勉強すれば、台湾や香港の漢字を読んでかなりの文章を理解できます。昨年の香港情勢も漢字語が読めた事で、普通の日本人が、直接的な情報を得られました(天滅中共とかのプラカード)。これは漢字を捨てた韓国人にはできない事です。

他にも『電脳』『炒飯』『餃子』など中国語も日本語として定着していて、更に漢字文化は面白おかしく発展していく余地があります。あまり深く考えず、漢字で遊ぶ感覚こそ、漢字の進化かもしれません。

【基本資料】

旧字体・新字体対照表 https://www.benricho.org/moji_conv/14_shin_kyu_kanji.html

昭和 17 年標準漢字表までの資料 以下の文化庁 HP より原本ダウンロード可 ↓

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/sisaku/enkaku/enkaku11.html

昭和 31 年『同音の漢字による書きかえ』平成 27 年の資料 以下ダウンロード可 ↓

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/shoiinkai/iinkai_20/pdf/shiryo_3.pdf

昭和 24 年 当用漢字表本文 原本 以下ダウンロード可 ↓

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/sisaku/enkaku/pdf/12_037.pdf

【参考文献】

GHQ だけではなかった「漢字廃止論」<https://globe.asahi.com/article/12738692>

『同音の漢字による書きかえ』の研究 <https://tech.de-de.jp/kanji/substitution.html>

二字漢語を構成する漢字の造語力の変化 / 本多由美子(一橋大学大学院言語社会研究科)

https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/lrw/lrw2018/P-4-07.pdf

高島俊夫男著 / 漢字と日本人(文春新書)

梅棹忠夫著 / 日本語と日本文明(くもん選書)

おまけ～全て旧字体で WORD に入力した『般若心経』 自作につき世の中にはありません～
書体は MS 明朝でしか変換されず、他の書体では記号扱いされてフォントが反映されない。
コピペした旧字体を使う事も実践しようとするれば、かなりの手間となる事例です。

佛說摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中無色無受想行識無眼
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死
亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
多咒卽說咒曰

羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶

般若心經